

(第33回) 音楽鑑賞会

～紀尾井ホール室内管弦楽団第118回定期演奏会～

9月27日(金)夕刻、紀尾井ホール室内管弦楽団(KCO)の第118回定期演奏会を聴いた。会場は勿論、四ツ谷の紀尾井ホール。27・28両日の開催で、13名のアイアン・クラブ関係者のご参加があった。

今回の定期演奏会は首席指揮者ライナー・ホーネック

とKCOが息の合った演奏で、来場者にヨーロッパ音楽の楽しさと神髄を味わって貰おうという意欲を感じさせる企画だ。「ミュトスとロゴス」シリーズ『未来を見抜く者』という壮大な謳い文句に、些かひるむ思いを感じながらホールに入った。会場は満席の盛況である。

まず当日のプログラムを紹介しよう。

J. S. バッハ ヴァイオリン協奏曲第2番ホ長調 BWV1042
 メンデルスゾーン 弦楽のための交響曲第10番ロ短調 MWV N 10
 (休憩)
 ベートーヴェン バレエ音楽「プロメテウスの創造物」Op. 43 (全曲)

最初のバッハは、ホーネックがヴァイオリンを奏でながらの指揮、KCOは弦のみ、そしてステージの中央にはチェンバロが置かれる。曲は3楽章構成。

第1楽章の優雅さと弦の響きの美しさで音の世界に引き込まれる。第2楽章では、筆者にはメロディーがメランコリックに感じられ、これが独奏部の感興を一層高めているように思われた。第3楽章では舞踏会を思わせるような早いテンポで、華やいだ、それでいて、しっとりとした落ち着いた風情を醸し出して曲を終える。素敵な幕開けの演奏だ。



指揮者 ヴァイオリン ライナー・ホーネック

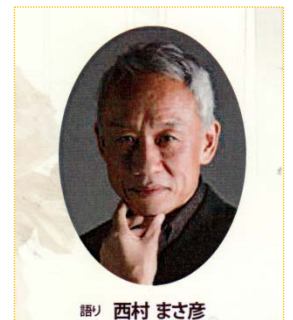
2曲目のメンデルスゾーンは、管も加わったKOCをホーネックが楽器は持たずに指揮する。メンデルスゾーンは恵まれた環境で育ち暮らし、社交的で明るい人柄であったと言われるが、そうした幸せな気持ちで聴く者に伝わってくるような演奏である。メロディアスで、時にドラマティックとでも言いたいようなメロディー、そして最後の「仲間に入りたいような」気持ちにさせる盛り上げ。決して通俗的という意味ではないが、エンターテインメント性に溢れた本当に楽しい演奏である。

気持ちよく休憩の時間を過ごし、ベートーヴェン

を聴く準備をする。今日のテーマ、「ミュトスとロゴス」『未来を見抜く者』は、この演奏を頭に置いて銘打ったものだろう。やや緊張して待つと、ステージに本日の語り役・俳優の西村まさ彦が登場。しかも腹話術のような頭だけの人形2つを両手にはめて、この曲の背景を語り出す。一瞬にして場が和む。

人形の一つはベートーヴェン、そしてもう一つはベートーヴェンにこのバレエ音楽の作曲を依頼した舞踊家サルヴァトーレ・ヴィガーノ。ヴィガーノが言う。「ハイドンの『天地創造』を超える曲を作ってください。それが出来るのはあなたしかいません!」。そして、2つの人形が椅子にちょこんと置かれ、指揮者を仰ぎ見ることとなる。そこにホーネックが登場する。

曲は序曲・序奏に続き16曲からなるが、4曲づつを一区切りに西村まさ彦の解説が入り、解説の後に4曲の演奏、そして次の解説となる。大変よく曲の構成や内容が理解できる有難い工夫だと感じる。



語り 西村 まさ彦

序曲は、プロメテウスがゼウスの禁じていた天界の火を盗み、最終的に人間を造り上げるといふ、波乱に満ちた物語の展開を示唆するような不気味な鬼

気迫る曲調に感じられる。

第1曲から第4曲は、プロメテウスが粘土から神を模して造り上げた2体の生き物が、単なる動物に過ぎず、これを破壊すべきか育てるべきか迷うが、果実を与えることで次第に変化が現れるという序盤の話。後半で曲に明るい曲調がみられるようになる。第5曲から第8曲は、この造り上げた生き物の教育をアポロンに依頼する話。ハープやフルートの音色の美しさが際立つ。そして第8曲ではプロメテウスの死が知らされる。ドラムの先導で緊張感のある演奏が強く訴えかける。第9曲から第12曲までは、第9曲での深い悲しみの後、第10曲からはプロメテウスがタレイア（喜劇の神）の力で再生し、その歓びと若い神々によるプロメテウスの賛美が歌われる。フルートをはじめとする管の音色が印象的である。そして第13曲から16曲では、造り上げた2体の生き物は、愛と知恵と徳を身につけ、遂に「人間」となって結婚するという締めくくりである。クラリネットの音色が明るい未来を指し示すように美しく響く。

全曲を聴き終えて、漸くこの日のテーマがおぼろげながら判ってきたように感じられた。「ミュトスト

ロゴス」そして『未来を見抜く者』、それは神話の世界で生まれた人間という生き物に、輝かしい未来を託したいというプロメテウスの思いを代弁するテーマにも思える。そう考えると、17世紀から18世紀半ばまで盛んであったバロック音楽の代表者・バッハをまず演奏し、次に産業革命とフランス革命などの市民革命を経た19世紀初頭から大きな流れとなるロマン派の代表としてメンデルスゾーンを演奏する。そして満を持して、新たな人間像を示すべく、これら2つの時代に挟まれた古典派のベートーヴェンの「プロメテウスの創造物」を演奏する、という意図が伝わってくる。この曲の作曲が1800~1801年ということを考えると、正に『未来』を実感できる時代に作られた作品だとの思いを強くする。

会場は、万雷の、鳴り止まぬ拍手で、その興奮をステージに伝える。拍手に答えてのホーネックと西村まさ彦の登場と挨拶、そしてKCOの熱演への称賛は、いつまで続くのかと思われた。それは、西村まさ彦が、演奏中ずっと指揮者を見つめていた2つの人形を再び両手にはめて、人形が御礼の挨拶をすることで漸く鳴り止んだ。

(保倉 裕・記)

以下余白